

CCI 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究 (S)

アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築

Newsletter

No. 2

February 2024



特集1

メンバーインタビュー
中川 裕

特集2

メンバーインタビュー
原田英典

活動報告

2023年9月～12月

紙芝居プロジェクト

海外派遣報告

業績

言語学を専門とされている中川裕さん（東京外国語大学・教授）にお話しを伺いました。長年に渡るボツワナでの現地調査を踏まえて、これまでメインテーマとされてこられたサンの人々の言語の問題からプロジェクトへの関わりについて、調査地を同じくする研究員の杉山さん、紙芝居プロジェクトに携わった中山さんも交えて語っていただきました。

*内容の一部を抜粋して紹介いたします。

基盤Sプロジェクトと中川さん：子どもの発達と言語について

杉山：当基盤Sプロジェクトでは「子育て」がキーワードになっていまして、中川さんの言語研究と子育て、どういう関係があるのでしょうか。

中川：私自身のこれまでの研究は「子育て」とはほとんど関係がありません。関連しそうなものは、クリックが乳幼児にどんな風に獲得されるかという問題を、少し前の科研（「音韻獲得の言語相対論の新展開：クリック子音獲得の事例研究」）で取り扱った程度です。そこで、杉山さんの質問への答えですが、私の言語研究の一部は、基盤Sプロジェクトの研究活動のインフラ整備に役立つことができそうだと考えています。つまり、調査研究活動に利用する素材提供というような仕方に関わっているかと思います。例えば、今進めている紙芝居プロジェクトでも、物語の選定、物語テキストや音声の処理や編集などにあたり、言語学的な観点からの取り扱いを経て、調査研究現場で使う素材を整備することが望ましいと思います。「子育て」プロジェクトの他の側面でも、言語資料が関与する際には、お手伝いできるだろうと考え、参加しています。とくにグイ語・ガナ語のように文字言語化されていない言語が関与するフィールド調査では、言語学者の視点はなおさら重要だろうと思います。その意味で、基盤Sにおける私の役割は、研究活動基盤の一部を整備するサポート的なものかな、と思っています。他の点で、どんなふうに基盤Sプロジェクトのお役に立てるかは、今後すこしずつわかってくるだろうと楽観しています。

一方、高田さんのプロジェクトから私自身が自分の研究のために学ぶことも多いだろうと期待しています。たとえば、私がいま手がけている別の科研プロジェクト

（「カラハリ狩猟採集民の持続可能な識字活動の基盤」）では、グイ語・ガナ語の正書法と識字のためのソフト的インフラを整備しようとしています。グイ語・ガナ語を失いつつある若い世代が、識字拡大を通して言語を維持したり復興しようとするときに利用できる基盤を用意しています。それと同時に母語識字に関心を持ち、動機づけ

のあるグイ人・ガナ人のなかに、グイ語ライター、ガナ語ライターを少しずつ増やしているようにしています。また、グイ人・ガナ人たちが、将来「子育て」に利用する可能性のある言語素材を用意しておくことは、私が目下やっていることと直接関係があります。これまでこの種の応用研究の経験のない私にとっては、この正書法プロジェクトを進めるために、基盤Sの活動、とくにアクションリサーチというアプローチが大いに勉強になります。



インタビューの様子

識字教育・正書法プロジェクト

①グイ語とガナ語の現状

杉山：中川さんの識字活動への想いを感じました。1992年からずっと長いことフィールドを見られていて、日本語でも30年もあったら言葉はどんどん変わっていくと思うんですが、グイ語とガナ語はどういう変化があるのでしょうか。

中川：重要な問題ですが、実はあまり体系的に調べていません。私は1992年の調査開始以降、ずっと同じ人たちと共に歳をとりながら、データ収集をしてきました。彼らの言語の変化は新語（借用語）が加わったぐらいで、体系的に変わったとは思えません。また、若い人たちの話すグイ語・ガナ語のデータは十分に集められていません。もちろん、使われる借用語は若い世代では一層増えているはずですし、狩猟採集に関連する語彙は著しく減っているはずです。文法的には複雑な代名詞の体系が正確に使えない話者は増えているようです。だから自然な言語の変化というよりは、衰弱に向かっているのは間違いないと思います。



写真 2回目の渡航、1993年に撮影した
トビウサギ猟のようす（撮影者：中川裕）

②紙芝居プロジェクト

杉山：紙芝居についてお尋ねします。中川さん提供のストーリーに基づいて、中山さんが紙芝居を作り、それを今東京にいるセケレご夫妻に見ていただいたという話を中川さんから聞きました。母語話者としてのお二人の反応はどうだったのでしょうか。

中川：彼らは2人とも伝統的な物語の実演を聞くのがそもそも大好きだそうで、あのツチブタの話もよく知っていました。また、今回の紙芝居用のグイ語版とガナ語版の編集は、私の別の科研プロジェクト（「言語音の多様性の外延の理解拡大：3基軸データによるカラハリ言語帯の音韻類型論」）のメンバーの大野仁美（麗澤大学）と私、それにセケレ夫妻も加わって、4人で行いました。彼ら二人は、自分たちが編集したテキストをもとに「紙芝居 paper theater」なるものができあがることに（いったいどんなものが出来上がるのかに）強い関心を持っていました。だんだん出来上がる絵を見たり、それについての自分たちの意見を言って、それが改訂に反映されることを楽しんでいただいているように思います。ハケドゥメレさんがガナ語版テキストを読み上げてくれて、それに紙芝居をあわせた動画クリップを作って見せたところ、ふたりとも大変喜んでいました。グイ・ガナの物語が加工されてこんなメディアになるということ、そこに自分たちも関与したことを楽しんでいました。

中山：私は、絵本みたいに綺麗に作ろうとか、こうした方が目立つし面白いっていう風な感じで紙芝居を作ってたんですけど、そしたらグイとガナの人たちは、「そうじゃない」「私たちのところでは、こうなんだ」と言って、リアリティの方が喜ばれる。リアルにすると「そうそうこれでいい」とすごく喜んでくれたり、それがすごく面白かったです（図）。中川さんは、紙芝居のやり取りの中でどういう点が面白かったですか？

中川：だいたい中山さんと同じです。彼らの意見を聞いていて面白かったのは、彼らが熱心に「こここうした方がいい」って、話題の焦点にするところが、私の予想や期待と違うときでした。例えば、どっちの手でどう持つとか。彼らにとっては、ある持ち方がすごく不自然に見えるらしい。登場人物が左利きという情報は物語にでてこないのに、槍は右手に持っているはずだとか、この持ち方は危険だとか。言われないと、私たちは気が付かないですね。人間がツチブタを妻にしているという現実離れした設定なのに、細部の描写は写実主義的です。彼らのフィードバックからは、どんなふうに表示するのが彼らにとって写実的なのがそのつど分かりました。それが面白く感じられました。中山さんもそう思われたのではないのでしょうか。

中山：はい。

中川：それから衣装については、紙芝居を1枚ずつ進めて見せていくうちに意見が変化しました。最初は、子供たちが見るならこのカラフルなものもいいと言ってたのですが、敷物のデザインの草案をみると、これは革製にみえるように直した方がいいと言い、そう言ってるうちに、衣装についても伝統的な革製 (cf. 写真3) が良さそうだ、そもそもこれは昔の人々の話なんだし、という結論に2人とも傾きだしました (図1,2)。それでも、カラフルな衣装の絵も保存しておいて欲しい、と言っていました。

中山：比べてみたいって言っていましたね。

中川：はい、言っていました。今回の中山さんの作品は、劇画的な写実画ではなくて絵本の挿絵かマンガ的に単純化したスタイルの絵ですね。だから手の詳細は解剖学的・生理学的にナンセンスでもよくて、手と物の位置関係がわかれば良いじゃないか、と私などは思います。彼らはそうじゃなくて、話に出てくる人たちの所作としては、これはちょっとダメと感じて、こんな風に直して欲しいと、フィードバックしたみたいでした。



図1. 中山が作成した紙芝居初めのバージョン。当初は、柄のついた布の服で、男性も身体全体を包むように着せていた。



図2. セケレ夫妻の意見を聞いて修正した紙芝居。男性は皆、上半身は裸。男女とも野生動物の革製の服を着ている。2人ともこの修正案に喜んでくれた。

紙芝居の修正前 (図1) と 修正後 (図2)

杉山：このストーリーは中川さんから提供されたストーリーなんですよ。これはどのようなシーンで話されるのでしょうか。

中山：子どもたちとかに夜話したりするんですか、皆さん？

中川：そうなのですが、聴衆は子どもとは限らない。青年、成人も喜んで聞きます。児童文学には通常期待されないような大人向けの設定や会話、情景描写が含まれる話もあります。子どもが同席しているところで、ギョッとするようなセリフやシーンが語られることもあります。子どもは、わからないところは飛ばして、別の箇所を楽しむのだと思います。

中山：でもあのお話は紙芝居にするのは、とてもしやすかったです。

中川：そうですね。あの物語を選んで良かった。グイ・ガナの物語と聴衆の関係は、「日本昔ばなし」的なジャンルよりも、落語のそれに似ているように思います。聴衆は年齢を問いませんし、また、聴衆の大半は「噺」の概要を知っていて、印象的なセリフも覚えているようです。同じ物語のいくつかのバージョンを聞くと、あちこち端折っていたりします。聞き手の多くは、端折った箇所は知っているし、端折られても次に起きる出来事は知っているから話はわかる。次にどんな歌がでてくるかも知っている。紙芝居にする場合、大事な情景がなかなか分かりやすい絵にできない、ということがあるかもしれませんが、その情景ぬきでも、きっと話は通じます。聴衆全体にとっては、十分な情報が紙芝居の絵から分かるだろうと思います。

中山：あ、そうなんです。よかったです。初めて聞くんじゃないんですね。

中川：聴衆は子供ばかりじゃないでしょうから、初めてじゃない人が大半だと思います。出来上がった紙芝居をみて、セケレ夫妻も、大人にも見せるのがいいと言っていました。

杉山：中山さんによってイメージ化されたものを見て、ストーリーを知ってる現地の人々がどのような反応をするのか、より楽しみになりました。



写真3 採集にでかける年長の女性たち（1995年1月）

肩からさげている風呂敷や腰に巻いているスカートは伝統的な革製である。（撮影者：中川裕）

衛生工学・環境工学を専門とされている原田英典さん（京都大学ASAFAS・准教授）にお話しを伺いました。アジアとアフリカで多くの現地調査を踏まえて、これまでメインテーマとされてこられたサニテーションの問題からプロジェクトへの関わりについて、S科研代表の高田さんと研究員の杉山さんも交えて語っていただきました。*内容の一部を抜粋して紹介いたします。

林：原田さんの研究のテーマについてお話し頂けるでしょうか。

原田：ぼくは元々環境衛生工学が専門なんですけど、その分野では珍しく、基本、低中所得国をフィールドにしてきました。通常、フィールドワークすること自体あんまりない。いたとしても、主たるアクティビティではない分野なんですけど、はじめは東南アジア、それからアフリカですね。基本的にはどうやったらサニテーションが地域でうまく成立するか、どうまわるかというのを、技術的側面が多いですけど、必ずしもそれだけに留まらずに研究しています。

サニテーションの研究をしていくと、水との境界が曖昧というか、だんだん融合してくるんですね。使ったあとの水が排水になったりしてサニテーションになりますし、水とサニテーションについて国連とかでもいわれるのは、生活に使う水を汚す、かなりの重要な要因が汚物なんですよ。それでそこは一緒に語られることが多いです。地域の衛生を改善しようと思ったら、もちろんきれいな飲み水を持ってくることも大事ですけど、きれいな飲み水持ってきたそばから生活環境が糞便で汚染されていたら水も汚れますし、そこは一体的に取り組むべきだというふうに言われています。実際サニテーションをベースにして健康のことをやればやるほど、水とだんだん混ざってくる。もうちょっと言えば、サニテーションというのは、汚物をトイレだけではなくて、トイレを含めて「始末をうまくつける」こと。それは「処分」という意味でのディスポーザル（disposal）でもいいですし、「何かに活用する」というのもいいんですけど、まあ、「始末をうまくつけること」って、わたしは言っているんです。訳語としてよい日本語があんまりないので難しいんですけど。そうすると、とてもゴミの問題と親和性が高く、実際、日本の法令上も汲み取りトイレのし尿は廃棄物扱いでゴミとして扱われてますし、アフリカとかのフィールドでもトイレって汲み取りが多いので、そうするとゴミのセクターの人が汲み取りをしたりすることもありますし、健康セクターの人がしてることもあるっていうので、水とサニテーションとゴミは、よく境界を越えながらやりますね。

林：S科研のテーマである「定住・集住に伴う「健康」の再編（定住化）/ 子どもの衛生行動の変容」（ボツワナ）に関連してはいかがでしょう？

高田：（補足として）定住化と集住化が進むと当然、日々の問題としてトイレの問題が出てきますし、広い意味での健康っていうのを考えたいな、っていうのと、あとは定住と共に農牧民、カラハリとかツワナっていう農牧



インタビュー中の原田さん

民との接触が強まって、生活にいろいろな側面に影響が出るってということもあるので、それもサニテーション的な視点で見ても興味深いことが起こっているんじゃないかな。

原田：改めて聞くと、具体的にシャープに「これ」ってというのはなかなか難しいですけど、すごい繋がる場所が多いと思うんですね。サニテーションが問題になるのは、人が定住して集まっているところだと思うんですよ。私はベトナムで初めてサニテーションのプロジェクトをやったときの村が、ベトナムの農村は農村なんですけど、もともと焼畑をして移動生活をしていたところが、ベトナム戦争が終わって、政府の方針で定住政策のもとで定住化が進みつつあるところだったんですね。で、彼らはもともと移動していたので、固定したトイレを持っていたような人々ではなかったんですけど、定住して、ベトナムの政策のもとで学校に行くようにしたりとか、というなかでサニテーションが注目されるようになって、そこにトイレを入れるっていう話しだったんですね。ですので、いわゆるもともと定住していたベトナムの農村の人たちにサニテーションを入れる話しよりも、ちょっとハードルは高かったんですよ。トイレというものが、より



ベトナムの農村で農業循環型トイレの建設に参加する
(2003年) 提供：原田英典

自分たちの生活から遠いものだったので、そういうところに新しい習慣を根付かせるのって、単にトイレを入れたらどうかという話だけではなくって、どんなふうに彼らにトイレの意義を伝えたりとか、あるいは、継続的に働きかけて、衛生的に使い続けられるようにしたりとか、そういうのを経験してたんですね、一番最初に。そういうことが大事だと思って、で、テクノロジー的なことだけではなくて、(サニテーションを)入れる前もそうなんです。どういうふうに彼らにサニテーションというものを紹介して、というところからすでに働きかけのプロセスは始まるので、そういうところから働きかけて、どんなふうに彼らのモチベーションを生み出して、維持をするのかっていうのは、いまのザンビアでやってるプロジェクト(*SATREPS)も含めてずっと引きずっているところなんですね。だから、移動生活をしていて小規模だったのが、定住化してきて集住化してきてっていう、そこで生じる問題としては、サニテーションの問題ももちろんそうです。どうやったらサニテーションが成立するかっていう話の中で、さっき「一番難しいのはスラムだと思う」という話して、そこで関心が高まってますけど、とはいえ、高田さんの科研のコンテキストとベトナムの農村でやってた時のコンテキストは親和性が高いので、直接何か、っていうのはまだ見つかりませんが、対象としている場とぼくが経験してきたことは、それなりにオーバーラップするなとは思いますがね。

あともうひとつ、高田さんの科研では子どもが主たるフォーカスだと思うんですけど、衛生状態が悪くて一番影響を受けるのは子どもで、下痢は衛生状態が悪いときの主たる健康の結果なんです。下痢は世界で3番目の5歳未満児の死亡要因になっているものですし、いろんな統計があるので数字自体にそんな厳密性はないんですけど、水と衛生の不備によって、世界の下痢の58パーセントが引き起こされているっていう数字もあたりして、UNICEFなんかは、子どもの命を守るためにトイレを入れる、っていうのをメッセージとして打ち出しているの、子どもだけに何かっていうのはあんまりないかもしれないですけど、少なくとも結果としては水・衛生の研究でも子どもは関心が高い対象になりますね。

林：狩猟採集民のようなもともとトイレがないような人たちにとって、トイレを含めて「衛生」というのをどういうふうに伝えていけば良いのか、アイデアを教えてください。

原田：ぼくは「サニテーション」で言葉を使うんですけど、極端な話、トイレがなくてもサニテーションというのはあると思うんですよ。その地域の人たちが、どうやって汚物の始末をつけていくか、っていうことであれば、例えばですけど、自分たちが守ろうとしている水源を汚さないようなところに排泄をしに行ったりとか。あるいは、（排泄後に）土をかぶせたりとか。そんな大げさなものでなくても、毎回、ちょっとスコップでやって、とか。そういうのも含めて意識的であれ、無意識的であれ何かしら汚物に始末を付けて、自分の生活の質を上げるような要素があったら、それはサニテーションだと思うんですね。だから、トイレということに特にこだわらなければ、あらゆるところで、「みんなサニテーションどうしているんだろう」という関心はわきます。

高田：なるほど。Folk Botany とかね、Folk Biology とかあるけど、Folk Sanitation という分野もあり得る。

原田：あぁ、そういうひといました。なんか本で、そういうのを読んだことがあります。衛生工学者が人類学的なことを、いまぼくが言ったような関心で地域を見てるっていう人が、そんなに多くはないでしょうけど存在しています。

高田：それって、人間にとってかなり普遍的な問題だから、それこそ歴史…ギリシャ時代から遡って、きっといろんな試行錯誤を続けてきた人たちがいるだろうから、面白いよね。研究領域として。

原田：私は行ったことないですけど、私の指導教員のふたりの先生は、ポンペイの遺跡の発掘にそういう観点の協力で行ってました。

高田：へー！それは面白い。

原田：その昔の街が、どうやって汚物を始末してたか。要は、都市なので下水道的なものはあるんですよ。でもそれは専門の人でなければ詳



カメルーン東部州バカ・ピグミー集落近くのわき水にて水質検査のために水の採取（2020年）

撮影：林 耕次

しいメカニズム，どういう機能でどういうデザインで都市の衛生を機能させたのかわからないので，考古学者の集団に呼ばれて，定期的に行ってみたいのです。

高田：あぁ，そうなんですか．ほんと，ローマ帝国っていったらインフラの水で広まった帝国みたいな…．

原田：有名ですよ．

林：プロジェクトの共通認識として高田さんにお伺いしたいのですが，高田さんのフィールドであるボツワナのニューカデの場合は，政府の定住化政策によってサンの人々が一カ所に集められて家を造って，トイレも造られている．もともと移動生活をしていたサンの人々はトイレをどのように受け入れているのでしょうか？

高田：いま，本当に問題になっていると思うんですけど，トイレだけじゃなくて，広く水が大きな問題になっていて，トイレは開発計画のなかに組み込まれていて，それなりにプロットをきちんと作った人のところには申請すればトイレが支給される仕組みにはなっているんですけど，作るよりも維持する方が遙かに大変で，ずっと汚物の処理をするとか，水を供給し続けるのは難しいですね．で，トイレどころか水もある程度の共益費みたいなのを払わないと，最低限のもの以外は止められちゃう仕組みなので，止められた状態のときがけっこうあって，そうするとトイレはどんどんどんどん汚物が貯まっていくばかりになって，おしる，より不衛生なスポットになっちゃうんですよ．そうすると，それで，またひとは使わなくなって…みたいな負のスパイラルみたいなのがけっこういろんなところで起こっているというのがありますけど．

杉山：わたしも調査しているときに，2週間水がストップして，結構死にそうな…命の危険を感じる，私自身ギリギリになったりして「やばいな…」っていうときがたくさんあって，ほかの払える人は，きれいな水が水道から出てくる．でもそれができない人，水道が家（の近く）にない．それからお金を払えない人は，お金を持っているときだけ，その水道の水をもらいに行くっていうシステムなので，それがあつかないかですごく貧富の差…広がりつつある貧富の差をみんなに突きつけられるような…．

高田：もともとの供給の水自体が，地下水からおっきなポンプでくみ上げて，かなりの何十キロもの距離を運んでるんですよ．そのポンプとパイプが，それほどメンテナンスが十分じゃなくて結構故障するんですね．そういうハードの面での水の供給が滞るといって，



ボツワナ，ニューカデの再定住地に造られたトイレ
（中央；2016年）撮影：杉山由里子

さっき言った、ソーシャルな面でのお金を払わないから止めるっていう両方のネガティブなファクターが結構多いですね。

原田：いまの、このシーンだけでも、十分、研究が成立する気がしますけどね。

高田：あ、そうですか。

原田：なかなかいま自分のリソースがないから行けないですけど、移動していたときよりも、定住したことによって水に対するストレスは高まっている…。変な言い方ですけど、不安定なインフラに基づく生活になったことによって、水のアベイラビリティ（可用性）がむしろ低下したかもしれないし、それに伴って、もしかしたら水、あるいはサニテーションに関わる…さっき下痢の話をしましたけど、健康リスク・下痢のリスクがむしろ高まっているかもしれないですね。

高田：はい、確かに。

原田：たぶんそれは、もし、わりとむかしの生活を残している集団があって、直近で移動してきてそういった問題を抱えている集団があって、ふたつの地域でどういう水の利用実態なのかとか、それで水とか生活空間がどんな汚染状態なのかとか、それに伴って下痢のリスクがどうなっているのかっていうのを描くだけでも、十分興味深い研究になりそうですね。

（*インタビューの完全版は、近日、ホームページ上で公開予定です。）



ザンビア・ルサカ市周縁の低所得地区の共同水栓での水汲み様子（2019年）撮影：原田 英典

***SATREPS**（**S**cience and **T**echnology **R**esearch **P**artnership for **S**ustainable Development）

SATREPS（サトレップス）とは、地球規模課題の解決に向けた日本と開発途上国との国際共同研究を推進するプログラムです。科学技術と外交を連携し相互に発展させる「科学技術外交」の一環として、地球規模の課題解決を目指す国際共同研究を推進します。

紙芝居を通じてバカ・ピグミーの衛生意識を探る

林 耕次・中山恵美（京都大学ASAFAS）

NewsletterのNo.1では、「紙芝居プロジェクト」の第1作目として『ツチブタ女の物語』（グイ(Glui)・ガナ(Gllana)の民話)の企画について紹介しましたが、第2作目としてカメルーンのバカ・ピグミーの子どもたちを対象に、衛生意識を育むことを意図した紙芝居を作成中です。バカ・ピグミーの日常生活を通じて、水くみや掃除、排泄や手洗いといった身近な事例を題材として取り上げています。(↓うち3場面を紹介しています)

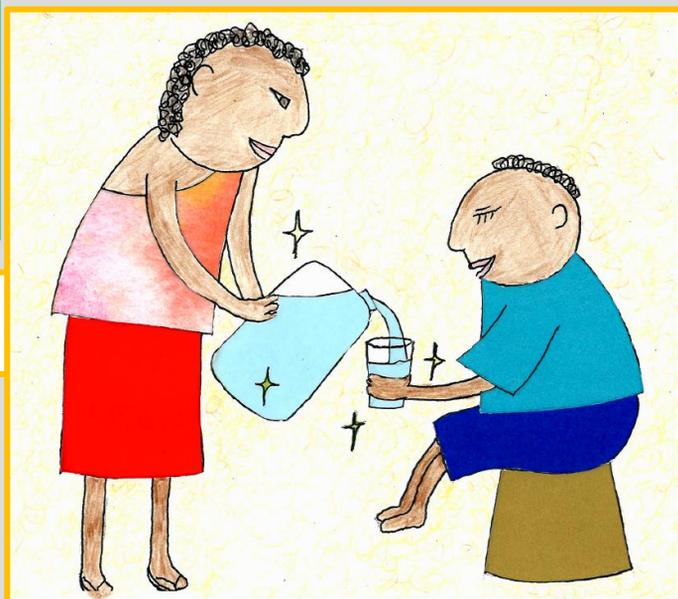
ただ、現地の人々にとって、実際にどの程度内容について共感してもらえるかは未知数で、ことばや表現の問題も含め、今後は現地調査を踏まえながら作品としての完成を目指しつつ、そのプロセスについても紹介していきます。

【これまでの経過】

- ・カメルーンの子どものバカ・ピグミーを対象とした紙芝居企画の発案。
 - ・林が研究項目としているサニテーションの問題に関連したストーリーとラフ画を作成。高田教授からは「アクション・リサーチの一環で啓蒙的な要素を入れてみましょう」との進言。
 - ・中山による下書きとテキスト作画/執筆（*林と何度か打ち合わせ）
 - ・日本語のストーリーをベースに英語、フランス語での翻訳（意識）。
- ・2024年2月中旬より、林がカメルーンにて現地のNGO関係者、学校関係者などと内容を推敲したうえでバカ語への翻訳。その後、実際にバカ・ピグミーの子どもや親たちにみせて反応を記録予定。



①ある日、ドゥメ君は家の瓶の水を飲んで、お腹を壊してしまいます。



②病にならないためには、きれいな容器で煮沸した水を飲むことが大事。



③また手を水で洗って清潔にすることなどが、提案されています。

おもな業績 (1)

論文

Gomi, Ryota., Yasufumi Matsumura, Masaki Yamamoto, Mai Tanaka, Allan John Komakech, Tomonari Matsuda, Hidenori Harada (2024) Genomic surveillance of antimicrobial-resistant *Escherichia coli* in fecal sludge and sewage in Uganda. *Water Research* 248, 120830-120830. 10.1016/j.watres.2023.120830

Miyake, E., & Takada, A. (2023). Land use and interethnic relationships between the !Xun and the Ovawambo in post-independent north-central Namibia. *Hunter Gatherer Research*, <https://doi.org/10.3828/hgr.2023.9>, doi:10.14989/207689

Moonkawin, Jakpong., Loi T. Huynh, Mariane Y. Schneider, Shigeo Fujii, Shinya Echigo, Lien P. H. Nguyen, Thu-Huong T. Hoang, Hai T. Huynh, Hidenori Harada (2023). Challenges to Accurate Estimation of Methane Emission from Septic Tanks with Long Emptying Intervals. *Environmental Science & Technology* 57(43), 16575–16584, 10.1021/acs.est.3c05724

Hiroshi Nakagawa (2024) Onomatopoeia in Glui (Kalahari Khoe), *Onomatopoeia in the World's Languages*: 197-207

Rifqi MA, Hamidah U, Sintawardani N, Harada H, Nyambe S, Sai A, Yamauchi T (2023). Effect of handwashing on the reduction of *Escherichia coli* on children's hands in urban slum Indonesia, *Journal of Water and Health* 21(11), 1651-1662, 10.2166/wh.2023.121

Strande, Linda., Barbara Evans, Marcos von Sperling, Jamie Bartram, Hidenori Harada, Anne Nakagiri, Viet-Anh Nguyen (2023). Urban Sanitation: New Terminology for Globally Relevant Solutions? *Environmental Science & Technology* 57(42), 16575–16584, 10.1021/acs.est.3c05724

Yokoya S, Suzuki K, Sai A, Yamauchi T (2023). Exploring the Barriers and Coping Strategies Faced by Male Nursing Students in Japanese Nursing Education. *Asian Nursing Research* 17(4). 219-225, 10.1016/j.anr.2023.08.003

書籍 (単著, 編著)

クック峯岸治子・高田明(編) (2023). 日本における言語社会化ハンドブック. 東京: ひつじ書房.

高田明 (2023). 相互理解と文化. 大内雅登・山本登志哉・渡辺忠温(編), 自閉症を語り直す: 当事者・支援者・研究者の対話. 東京: 新曜社, pp.173-184.

その他刊行物

江戸川夏樹, 原田英典 (2023). きょう「トイレの日」世界の5人に1人に不自由 インフラ老朽化も. 朝日新聞デジタル. 2023/11/19.

江戸川夏樹, 原田英典 (2023). 世界のトイレ事情知ってますか. 朝日新聞 (夕刊). 2023/11/18.

京都大学, 原田英典 (2023). 水・衛生改善と下痢リスク低減に向け 京大, ザンビア大と共同研究協定を締結. 文教速報. 2023/12/20.

おもな業績 (2)



著者	大内 雅登 編著 山本 登志哉 編著 渡辺 忠温 編著
ジャンル	福祉・看護・医療
出版年月日	2023/05/20
ISBN	9784788518155
判型・ページ数	4-6・320ページ
定価	2,860円 (本体2,600円+税)

その他刊行物つづき

京都大学, 原田英典 (2023). 京都大学 ザンビア大学と共同研究協定. 週刊文教ニュース. 2023/12/18.

塩野義製薬, African Mothers, 原田英典 (2023). 塩野義製薬、「Mother to Mother SHIONOGI Project」第三期事業における連携事業の契約締結について- タンザニアでの下痢症予防を目的としたアプリ開発 - . 日経BP 日経バイオテク オンライン. 2023/12/26.

塩野義製薬, African Mothers, 原田英典 (2023). 「Mother to Mother SHIONOGI Project」の第三期事業としてタンザニアでの乳幼児の下痢症予防アプリ開発 塩野義製薬 -アプリ開発でAfrican Mothersおよび原田英典京大准教授と連携契約締結-. 医薬通信社. 2023/12/28.

高田 明 (2024). コメント2: ボツワナ・ハンシー地区におけるグイ／ガナの長期継続調査. 河合香史・中川尚史(編), 社会性の起原と進化・公開シンポジウム「海外調査地開拓のすすめ」報告書. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・科研費基盤(s)「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」事務局, pp.71-86.

基調講演・招待講演等

Harada, Hidenori (2023). Challenges and Opportunities for Water, Sanitation and Hygiene (WASH) in sub-Saharan Africa, Seminar of Environmental Engineering/National Taiwan University. Tainan. 2023/10/26.

原田英典 (2023). 「水・衛生の役割と「Mother to Mother SHIONOGI Project」への期待」. Mother to Mother SHIONOGI Projectの新規開発事業について/African Mothers, オンライン. 2023/12/22.

原田英典 (2023). 「アジア・アフリカの水・衛生：サニテーションの価値とは？」. 大学教員ビジット授業/高島高校. オンライン. 2023/12/14.

原田英典 (2023). 「世界のトイレと天王山のトイレを考える2023/12/03,大山崎」. 世界のトイレと天王山のトイレを考える/天王山にバイオトイレをつくる会. 大山崎町, 京都. 2023/12/03

原田英典 (2023). 「アジア・アフリカの水・衛生：サニテーションの価値とは？」. 高大連携の一環としての膳所高等学校生徒向け公開講座/膳所高校. 京都市. 2023/12/1.

学会発表・学術報告等

- Fujii, Shigeo., Hidenori Harada, Suwanna Kitpati Boontanon, and Shuhei Tanaka (2023). Comparison of Water Use and Wastewater Management Practice in 15 Communities in 7 Asian Developing Countries. 29th Joint KAIST-KU-NTU-NUS Symposium on Environmental Engineering/NSU. Singapore. 2023/11/19.**
- 原田英典 (2023). 水・衛生に由来するリスクの可視化と住民参加型アプローチ. 世界湖沼会議 (第19回) に向けたワークショップ/ILEC. 草津. 2023/09/29**
- Matsui, Saburo., Hidenori Harada, Satoyo Ono (2023). The ash alkali composting method of feces provides excellent humanure for African agriculture in the ecological sanitation practice, Annual Conference 2023/ISSS. Online. 2023/11/28.**
- Moonkawin, Jakpong., Loi Tan Huynh, Shinya Echigo, Hidenori Harada (2023). Methane emission from septic tanks with long emptying intervals. IWA Aspire Conference & Exhibition 2023 / IWA. Kaoshung. 2023/10/24.**
- Rifqi MA, Hamidah U, Sintawardani N, Sai A, Yamauchi T (2023). Hand hygiene and child diarrhea in urban slum Indonesia during the COVID-19 Pandemic, The 7th International Symposium on Green Technology for Value Chains, Bandung, (Indonesia), online, 14 November 2023 (14-15 November 2023).**
- Sai A, Sintawardani N, Yamauchi T (2023). Mental Health Challenges: Faced by Urban-slum Sanitation Workers in Indonesia, The 7th International Symposium on Green Technology for Value Chains, Bandung, (Indonesia), online, 14 November 2023 (14-15 November 2023).**
- 佐井旭、山内太郎(2023). マレーシアの都市部に居住する若年男性のボディイメージと社会文化的要因. 第88回日本健康学会総会, 弘前大学(青森県弘前市), online, 2023年12月1日 (2023年12月1日-2日)**
- Sunazawa F, Nilawati D, Sintawardani N, Sai A, Yamauchi T (2023). Menstrual knowledge and attitude of schoolgirls in urban-slum Indonesia, The 6th FHS International Conference, Faculty of Health Sciences, Hokkaido University (Sapporo, Hokkaido), 20 October 2023.**
- Sunazawa F, Nilawati D, Hamidah U, Sai A, Sintawardani N, Yamauchi T (2023). Menstrual characteristics and obesity among adolescent girls of Bandung, Indonesia, International Society for Sanitation Studies Annual Conference 2023, online, 28 November 2023.**
- 砂澤楓華、佐井旭、山内太郎(2023). インドネシアの都市スラムに居住する女子学生の初経及び月経に関する知識、態度、経験について. 第88回日本健康学会総会, 弘前大学(青森県弘前市), online, 2023年12月1日 (2023年12月1日-2日)**

学会発表・学術報告等

Takada, A. (2024). 5th colloquium of ecological future making of child rearing: Household Food Insecurity and the Nutritional Status of San Women and Young Children in Rural Botswana, Kyoto University, Kyoto, Japan, 15th January 2024. (Organizer)

Takada, A. (2024). 4th colloquium of ecological future making of child rearing: Diversity within diversity: a description of Tshaasi, Kyoto University, Kyoto, Japan, 9th January 2024. (Organizer)

Takada, A. (2023). 116th KUASS: Survival strategies of migrants and internal displaced populations in Cameroon: Between social protection and entrepreneurship responses, Kyoto University, Kyoto, Japan, 30th November 2023. (Organizer)

高田明 (2023). コメント. 会員企画シンポジウム17: 詩的リアリティとヴィジュアル・ナラティブ. 日本質的心理学会第20回大会プログラム抄録集, pp.61-62. 立命館大学大阪いばらきキャンパス. 2023・11・4-5 (11・5).

高田明 (2023). コメントと質問. 共同企画X ラウンドテーブル: 音楽的社会化の展望: 子どもの音楽的発達を捉える思考枠組をめぐって. 日本音楽教育学会第54回大会プログラム, p.131. 弘前大学. 2023・10・14-15(10・15).

高田 明 (2024). 社会的距離と感情: グイ/ガナの場所をめぐる物語りの分析から. シンポジウム: 情動と仮想空間—感覚を通じた距離と共在の再考. 京都大学. 2024・1・27.

高田明 (2023). 個別4. ニホンザルおよびチンパンジーの社会的活動に対する自然環境, 集団構成, 遺伝的特徴の影響. 第5回 多階層ネットワーク研究ユニット ユニット会議・研究会. ハイブリッド開催 (Zoom および 京都大学理学部セミナーハウス). 2023・11・8.

Uz Zaman MD, Nyambe S, Sai A, Yamauchi T (2023). Exploring menstrual hygiene management and socio- demographic factors affecting menstrual product usage among nursing and midwifery students in Bangladesh, International Society for Sanitation Studies Annual Conference 2023, online, 28 November 2023.

Watanabe, Ryuichi., Takahiro Yokoi, Hidenori Harada (2023). Effects of Meta-Model Structure on the Prediction Model for 2-MIB Concentration Using Gated Recurrent Unit. IWA Aspire Conference & Exhibition 2023 / IWA. Kaoshung. 2023/10/24.



日本における言語社会化ハンドブック

クック峯岸治子・高田明編

定価3000円+税 A5判並製カバー装 354頁

ISBN978-4-8234-1049-9

ブックデザイン 三好誠 (ジャンボスペシャル)

Japanese Handbook of Language Socialization

Edited by Haruko Minegishi Cook and Akira Takada

これからの時代に、重要で切り開かれるべき社会的言語学。

関連イベント

子育ての生態学的未来構築コロキウム @京大ASAFAS

第4回 (2024年1月9日) 対面 →

講演者: **Saeed Radawi** (Humboldt university Berlin)
 “Diversity within diversity: a description of Tshaasi”

The 4th Colloquium of Ecological Future Making of Childrearing

[Date]
9th January 2024 (Tuesday) 15:00-17:00

[Venue]
#318, Inamori Memorial Foundation Building (third floor),
Kyoto University

[Hosted by]
The JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (S)
“Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa” (Primary Investigator: Akira Takada).

第5回 (2024年1月15日) 対面 ↓

講演者: **Leepile Tebogo Thandie** (Botswana International University of Science and Technology)
 “Household Food Insecurity and the Nutritional Status of San Women and Young Children in Rural Botswana”
 コメンテーター: 渡邊純子 (南九州大学・教授)

第5回 コロキウムの様子



The 5th Colloquium of Ecological future making of childrearing

[Date]
15th Jan 2024 (Monday) 15:00-17:30

[Venue]
#Large-sized meeting room, Inamori Memorial Foundation Building (third floor),
Kyoto University

[Hosted by]
The JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (S)
“Ecological future making of childrearing in contact zones between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa” (Primary Investigator: Akira Takada).



第116回KUASS (Kyoto University African Studies Seminar)

(2023年11月30日) 対面 →

講演者: **Antoine Socpa** (Prof. Department of Anthropology, University of Yaoundé I, Cameroon)
 “Diversity within diversity: a description of Tshaasi”

116th KUASS
Kyoto University African Studies Seminar

Prof. Dr Antoine Socpa
 Department of Anthropology & CASSRT
 FALSS - The University of Yaoundé I - Cameroon
 Fellow 2023 - Canon Foundation & Kyoto University Japan
 Africa Exchange Program

Survival Strategies of Migrants and Internal Displaced Populations in Cameroon: Between Social Protection and Entrepreneurship Responses

The various political crises in the Central African Republic from the mid-1980s pushed thousands of people into exile in Cameroon. Since then, these refugee populations have benefited from social assistance/protection in the form of food rations, housing, medical assistance, food for work, etc. On the other hand, thousands of Cameroonian Anglo-Berberie and Bakweri populations respectively from the North-West and South-West regions, have become internally displaced as a result of the ongoing bloodshed crisis between the state army and the armed separatists' groupings. These Internal Displaced peoples (IDPs) live mainly in the cities of Douala and Yaoundé.

To mitigate the effects of displacement on affected populations, several social protection measures have been taken, including rapid humanitarian assistance and a social safety net programme. But due to the enormous needs to be met and the lack of resources from donors and the State, these wandering populations are forced to develop resilience mechanisms in order to survive. Thus, the overall goal of this research is to analyse the migrant's quests for social esteem and integration in host territories. More specifically, the research objectives are to: (1) analyse the strengths and weaknesses of the social protection mechanisms put in place by humanitarian workers; (2) study the resilience strategies developed by migrants to meet their needs; (3) explore how they envisage their future in the short and long term, especially for internal migrants who are not always welcome in the receiving zones in general and in the cities in particular where exist the already the crisis of belonging between former long term migrants and the autochthonous populations.

As this research is still in progress, our presentation will mainly focus on the intersecting perceptions of migrants and hosts as well as the constraints affecting the processes of seeking social esteem and integration in the host territories.

Thursday, November 30, 2023
15:00-17:00

Room 318
Kyoto University, Inamori
Foundation Memorial Hall 3F

This Seminar is Co-hosted by
MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research (S)
Ecological future making of childrearing in contact zones
between hunter-gatherers and agro-pastoralists in Africa

For any inquiry please contact:
caaskyoto@gmail.com

THE CENTER FOR AFRICAN AREA STUDIES KYOTO UNIVERSITY
 11-1, Yoshida Honcho, Kyoto, Kyoto 606-8501, Japan
 TEL: 81-75-754-3800 / 7540
 FAX: 81-75-754-3822 / 3821
 E-MAIL: caas@caas.kyoto-u.ac.jp
 1995 (Institution) / 2005 (Incorporation)

京都大学アフリカ地域研究資料センターの公開講座を担当しました

関わる 育む 健康



衛生感覚 第3回：2023年12月9日(土) 15～17時

アフリカ熱帯地域に定住したピグミー系狩猟採集民バカ (Baka) の社会では、おとなたちが子どもたちに対して物事を積極的に教える行為はほとんどみられず、模倣しながら経験を積むことが一般的である。こうしたなかで、バカの子どもたちが日々の暮らしや活動を通じて、どのようにまわりの人びとと関わりながら、健康に結びつく衛生感覚を養い、意識しているのだろうか。この発表では、バカの人びとをとりまく生活環境の現状や変容を踏まえて、子どもによる水くみや排灌、調理などの事例を紹介しながら考える。

子どもの日常から探る
衛生感覚：カメルーン熱帯
バカ・ピグミーの事例から

林 耕次
(はやし こうじ)



京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員。総合研究大学院大学先端科学研究科博士課程修了、博士(学術)。1998年より、カメルーン東部州、熱帯雨林における定住した狩猟採集民/バカの暮らしと生態活動、及び社会変容について研究している。近著として『開座 サニテーション学 第5巻 サニテーションのしくみと共創』(共編著)。



第4回：2024年1月13日(土) 15～17時 野生動物マネジメント

熱帯雨林では家畜飼養ができないため、野生動物が主たるたんばく源として人びとの健康を支えてきた。ところが、カメルーン東南部では1990年代から森林のゾーニングが施行され、商業伐採が拡大するとともに、地域住民による狩猟や森林資源利用が制限されてきた。このような状況を打破するためには、保全機関と地域住民が協働して関わることで資源マネジメントを構築する必要がある。本発表では、そのような目的のもとでおこなってきたプロジェクトを紹介しながら、人間と野生動物の関係について考えてみたい。

コンゴ盆地・
カメルーンの熱帯雨林で
野生動物マネジメントを共創する

安岡 宏和 (やすおか ひろかず) 京都大学アフリカ地域研究資料センター・准教授。高知県生まれ。中野アフリカ地域研究、生態人類学を専攻。主な研究対象は、中野アフリカ狩猟採集民 (バカ・ピグミー)。著書に『アンチ・ドムス：熱帯雨林のマルチスピーシーズ歴史生態学』(近刊)。



子育て 第1回：2023年10月7日(土) 15～17時

人類学から考える子育て：子どもの成長はその子が置かれた家族や社会と深く結びついている。人類学は、子どもとそれをとりまく人々のやりとりが時代や地域によってさまざまなかたちをとりうることを示してきた。今回の発表では、南部アフリカのナミビア北中部に住んでいるクン・サンを事例として、こうした可能性について、皆さんと一緒に考えてみたい。具体的には、クン・サンにおける授乳の様式、ジムナスティック(養育者が腰の上で乳児をジャンプさせる一連の行動)の分析について紹介する。

高田 明 (たかだ あきら) 京都大学アフリカ地域研究資料センター・教授。主な研究は、アフリカ狩猟採集民、著書に『狩猟採集社会の子育て論：クン・サンの子どもの社会化と養育行動』(京都大学学術出版会、2022年)。『Hunters among farmers: The !Kun of Etokoka』(University of Namibia Press, 2022年)。『The ecology of playful childhood: The diversity and resilience of caregiver-child interactions among the San of southern Africa』(Palgrave Macmillan, 2020年) 等。

京都大学アフリカ地域研究資料センター
公開講座 シリーズ「関わる・育む・健康」
今回のシリーズでは、「関わる・育む・健康」をメインテーマとして、5回連続で公開講座を行います。アフリカにおけるさまざまな人や組織との関わり、それを通じて、子どもや新参者が社会の一員となれるように育んでいくこと、さらにはそのなかで目指されている諸個人や社会の健康について、5人の少社のアフリカニストが自らの研究に基づいて論じます。なおこの公開講座は、科研費基礎 (S) アフリカ狩猟採集民・農牧民のコンタクトゾーンにおける子育ての生態学的未来構築 (2022-2026年度) <https://www.cci.jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/efm/> の成果の一部です。



第5回：2024年2月3日(土) 15～17時 水と衛生

水・衛生と健康：ザンビア・ルサカの事例から
水の利用と汚水の始末(水・衛生)は、生きるうえで必要なことである。こうした私的な側面を持つ水・衛生は、一方では地域社会における公共的な側面も持ち、人びとと水・衛生との関わりは多様である。本発表は、ザンビア以南アフリカの水・衛生の現状を概観しつつ、水・衛生と人びとの関わりを考えたい。ザンビア・ルサカ市周縁地域の衛生環境についての調査結果を紹介しつつ、下痢リスクに注目した住民参加型アプローチに基づく水・衛生の試みを事例として、地域の人びとが主体となった水・衛生について考察する。

原田 英典 (はらだ ひでのり) 京都大学アフリカ地域研究資料センター・准教授。専門は環境衛生工学。フィールドワークによるアジア・アフリカの水・衛生および水環境の研究に従事。現在の主な研究テーマは、都市貧困地域における参加型下痢リスク管理、し尿回収からの温室効果ガス発生抑制、物質循環解析と流域管理、資源循環型ドライトイレの開発と実践など。SDG e 目標 6の公式監視メトリクスでもあるWHO/UNICEF JMPおよびUN-Water GLAASの監理委員。



第2回：2023年11月11日(土) 15～17時 死

環境の変化の中で死と向き合う：南部アフリカブッシュマン(セントラル・カラハリ・サン)の事例から
大切な人の死—これは私たちが誰しもが少なからず経験することである。しかし、誰しもが心に抱えているその喪失は、日常の中で意識するような題材ではなく、個人的に向き合っていくべきものという諦めが、死を前にした私たちをますます孤立させてきた。ボツワナに生きる狩猟採集民ブッシュマン(セントラル・カラハリ・サン)は、ふとした瞬間に溢れは消える喪失の感情を、驚き合わせ共感し合う。そのような死との向き合い方が、社会変容と共にどのように変化してきたかを考察していく。

杉山 由里子 (すぎやま ゆりこ) 京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員。地域研究、文化人類学を専攻。ボツワナの人びとに魅せられ、ボツワナ大学大学院アフリカ言語文学科に入学卒業までしてし。2015年よりほとんど毎年ボツワナに滞在しており、親に心配をかけ続けている。そのようにして執筆した論文のひとつが『卑いディスタンス：フガクウェ・ブッシュマンの死との向き合い方の変遷』(『文化人類学』87号2、2022年)。



講座を終えて

<第1回・高田明>

公開講座にご登録・ご参加ありがとうございます。一講師として、それから今回の連続シリーズのオーガナイズ役として心より感謝申し上げます。いずれの発表も、講師がアフリカで行ってきた長期間に渡る具体的な調査に基づいており、それぞれの現地の人々や土地に対する個人的な思いやそのときどきのそこでの半ば偶然生じた出来事を反映しています。その一方で、今回の連続シリーズのテーマである「関わる、育む、健康」は、私たちの誰もがその人生の中でしばしば向き合うことを迫られ、喜びを感じたりときには苦しんだりする課題だと思えます。今回の公開講座が、みなさまとこうした課題について一緒に考える契機になれば幸いです。

<第2回・杉山由里子>

今回の講座では、これまでの私の研究を実生活と呼応するようなかたちで発表できないか、ということ意識しながら準備をしました。死は誰もが経験することなので、ブッシュマンに限らず、誰もが何かしらの向き合い方を持っています。普段はあまり考えることのない死との向き合い方をみなさまに意識し考えていただくことで、今を生きるみなさまの感想を聞いてみたかったです。みなさまより「卑いディスタンスが日本の法事に似ている」とのコメントを頂き、なるほどと思いました。これまで、ブッシュマンらしさに注目してきましたが、“みんなで思い出しては忘れることの大切さ”や、“死との向き合い方がもつ記憶と忘却の両義性”など、死を通じた人類の普遍性にも気づかされました。参加してくださった皆様、ありがとうございます。

京都大学アフリカ地域研究資料センターの公開講座を担当しました

講座を終えて

<第3回・林耕次>

世界規模のコロナ禍を経て、「衛生」について身近に意識する機会が増えた方は多いと思います。しかし、今回の舞台となったカメルーン熱帯地域に暮らすバカ・ピグミーの場合は、現在でもほとんどパンデミック前と変わらない日常生活を営んでいるように映りました。彼らの「衛生感覚」というニュアンスを受講者のみなさんと共有するため、どのようにお伝えすればよいか悩みましたが、講座を通じて理解して頂き、共感してくださったコメントを多数拝見して安心しました。バカ・ピグミーの世界観や彼らを取り巻く環境、また、国際的な衛生の動向をより深く知って頂くうえでも、第4回（安岡）、第5回（原田）の公開講座にも改めて足をお運び頂けると幸いです。

<第4回・安岡宏和>

第4回は2018年からカメルーンで実施してきたコメカ・プロジェクトを中心に話しました。ブッシュミート・クライシスなどのプロジェクトの背景にある問題と、ハーベスト（収穫）にもとづくモニタリング方法を考案してきたプロセスについては、十分にお話することができました。やや抽象的な議論もしましたが、おおよそご理解いただけただようで安心しました。ただ、このアプローチが含んでいるラディカルな運動、つまり、中部アフリカの森において保全のベースモデルをランドスペアリングからランドシェアリングに転換していく運動については、時間の制約もあって十分に説明することができませんでした。この議論にかかわる研究成果は、近刊（2月末ころ）の『アンチ・ドムス：熱帯雨林のマルチスピーシーズ歴史生態学』（京都大学学術出版会）に書いてありますので、ぜひご覧ください。



公開講座の様子（左から 林さん、安岡さん、原田さん）

<第5回・原田英典>

サブサハラ・アフリカでは水と衛生の確保は社会的に重要な課題です。プライベートな問題であり、公共の問題でもある水と衛生は、廃棄物、排水、都市計画、公衆衛生などが複雑に絡む地域の問題でもあります。また、その効果は必ずしもすぐには現れず、将来の健康のための未来への投資でもあります。この未来への投資をどのように実現するか？講演では、身近な汚染やリスクを可視化するザンビアでの取り組みを事例に、教わるのではなく実感するアプローチを紹介しました。日本でも、多くの水を使い、多くの汚物を生み出し、多くの資源を投入して汚物を浄化して環境に返すことで、私たちの暮らしと健康が守られています。水はどこからくるのか、汚物はどこに行き着くのか？アフリカでも、日本でも、水と衛生を今一度考える機会となっていたらうれしいです。

事務局より

・2023年の年末から2024年の年始にかけては、海外研究者の来訪が相次ぎ、それに伴うセミナーの開催が続きました。

表紙を語る

2023年3月28日 / カメルーン東南部L集落にて / 撮影者：田中文菜

手前のバカの男性がエソホである。モングル（植物の葉で覆った半球形の家）の前に妻と息子がいる。エソホは定住村に家を持たず、畑と森を移動しながら生活していた。森に行くことを好み、物静かで、優しい人だった。2人の妻とたくさんの子どもがいた。

調査中、雨が降ってきた。エソホは、私の調査機器が濡れないように、バナナの葉を切って傘にしてくれた。雨が激しくなると、夫婦と子ども4人と私は、モングルに入った。エソホは0歳児を抱いて横になり、子ども達はエソホにくっついた。モングルの前をサファリアリの行列が通り、アリが獲物を運ぶ様子をみんな観察しながら、雨が止むのを待った。

ある日、エソホは、お腹が痛いと言った。10日ほどたって危篤状態になった。村人が集まった。夕方、小雨が降ったとき、エソホは亡くなった。バカも農耕民も私も、彼の穏やかな顔を見て泣いた。3日前に、小雨が降ったとき、隣の集落の最高齢の老人が亡くなったばかりだった。人々は、「雨がエソホを連れて行った。エソホは隣の集落の老人に会いに行った」と話した。

エソホは、昔のことをよく覚えており、私が聞くと、とても丁寧に教えてくれた。面倒みがよく、笑うとまばらな歯がみえて、笑顔が素敵だった。モングルの前で幼児と一緒に車のおもちゃをつくっていたのを思い出す。

編集後記

Newsletterの第2号をお届けします。特集記事として、研究分担者の中川さん、原田さんのインタビュー記事を紹介いたしました。本紙では、プロジェクトに関連した箇所を抜粋しておりますが、いずれも完全版はホームページ上で掲載しております（一部準備中）。
(KH)

Newsletter No.2 February 2024

2024年2月20日発行

編集・発行: 高田 明 (研究代表)

問い合わせ先 : cci.takada.lab@gmail.com

